

平成28年度 福島大学人間発達文化学類  
スポーツ・芸術創造専攻推薦入学試験  
小論文

<注意事項>

- ・ 解答は指定された解答欄に記入すること。
- ・ 解答は横書きとし、字数は指定を超えないこと。
- ・ 句読点、引用符、括弧などはいずれも1字に数える。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。
- ・ 算用数字及びアルファベットが連続する場合は、1マスに2字を入れる（1字と数える）。

資料 内田良著、『教育という病 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』、光文社新書、2015、（第3章一部抜粋）を読み、次の問いに答えなさい。

【問題1】

資料に記された部活動指導における暴力事案や著者の見解を踏まえ、教育の営みと体罰についてあなたの考えを500字以内で述べなさい。

【問題2】

資料の傍線部分に著者は、「暴力に代わる、効果的な指導方法を生み出すべく、みんなで知恵を絞ろうではないか。」と述べています。

部活動を例にして、あなたの経験も踏まえながら、その効果的な指導方法に対する考えを500字以内で述べなさい。

## 【資料】

### 桜宮高校の暴行自死事案もまた「教育」

2012年12月に大阪市立桜宮高等学校で、バスケットボール部の2年生男子が顧問からの暴力を苦にして自殺した事案は、世間を大きく騒がせた。翌年9月に開かれた刑事裁判の初公判では、裁判官、検察側、弁護側に示されたビデオ映像に、被告人である元顧問が生徒の頬を20発ほど激しく平手打ちする様子が収められていた。

検察側は、「口が血まみれになっても殴っていた」と指摘する。それほどに強い暴力だったのだろう。生徒はその翌日に、家

族に宛てた遺書を残して自ら命を絶った。「何を考えて殴ったのか」と生徒の母親が問い詰めたとき、元顧問の答えは、「指導です。強くなつてほしいと……」というものであった（『週刊朝日』2013年9月20日）。その当時の顧問の認識では、口が血まみれになるような暴力でさえ、指導すなわち教育活動だったというのである。

いまでこそ、顧問は深く反省している。しかし注意しなければならないのは、殴っているときは、「強くなつてほしい」と生徒のことを思いつつ、「指導」していたということである。

つまり、自殺した生徒は、「あなたのためにやっているんだから」と暗に示されながら暴力を振るわれ、ついには自死の道を選ぶことになった。「あなたのため」の指導でなぜ、生徒が死に追いやられてしまうのか。「教育」という営みに内包される暴力の姿が見えてくる。

「学校事故・事件を語る会」という被害者団体がある。同会のメンバーであり、ラグビー部の練習中に熱中症で中学生の子どもを亡くした遺族は、「学校の常識は、世間の非常識」と、学校を厳しく非難する。炎天下で子どもが倒れ込むまでランニングをさせ、さらには倒れた後も「演技をするな」と叱りつけ、そのなかで生徒は帰らぬ人となった。学校の外ではおおよそ許されないような人の扱いが、学校社会では教育という名のもとに容認されてしまう。

これらの事案は、極端な例である。ここまで激しく倒錯した教育実践が、日本の全域を覆っているということはない。多くの子どもたちにとって、学校は安全・安心の場であろう。

だが改めて確認したいのは、これらは極端な例ではあるけれども、だからといってそれは、リンチ事案でもなければしこき事案でもないということである。「教育の一環」で起きた不運にすぎないとされるのである。顧問本人も「指導です」と答え、また世の議論もそれを「行きすぎた教育」「行きすぎた指導」と言い表す。

痛ましい暴力事案でさえもが、「教育」という名のもとに起きている。「教育」の理想を先行させ、そこに潜む負の側面、すなわちリスクを見ようとしない精神構造がある。

2013年5月に朝日新聞社が3大学の運動部所属の学生を対象に調査（510名が回答、回収率は記載なし）したところ、「指導者と選手の信頼関係があれば体罰はあつていいか」との質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答が62%あつたという（『朝日新聞』2013年5月12日）。信頼関係があるという条件付きでの暴力容認派は、6割に達する。そして、「体罰」の肯定的な影響として、「気持ちを引き締まった」が60%、「指導者が本当に自分のことを考えていると感じた」が46%あつたという。

## 暴力に代わる効果的な指導方法

この調査は、さらに興味深い結果を示している。「指導者と選手の信頼関係があれば体罰はあつていいか」と「スポーツを教える側になつたとして体罰を使うか」の2つの質問について、小中高時代に指導者から「体罰」を受けた経験の有無別に回答の差を見たのが図10である。

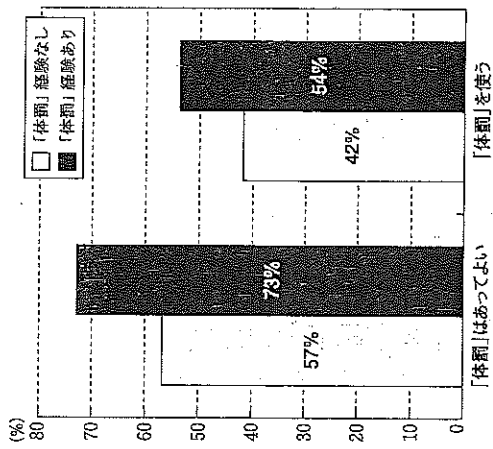


図10 暴力経験の有無別にみた暴力の肯定感  
出典：朝日新聞社の調査結果より作成

「体罰」経験ありの学生のほうが、いずれの質問においても、肯定的な態度を示している。すなわち、「体罰」を経験することで、「体罰」はあつてよいと感じるようになり、また「体罰」を使うことへの抵抗感も弱くなるのである。いわゆる、「暴力の連鎖」の図式がここから読み取れる。

ただし、そもそも問題として話が戻ることになるが、「体罰」経験なしの学生でも、「体罰」に対する態度はそれほど消極的では

ない点には留意すべきである。経験なしでも、経験ありの学生と大差なく、「体罰はあつていい」と考え、実際に教える立場になれば「体罰を使う」と学生たちは答えている。自分が暴力を受けていないとしても、暴力に一定の意義を認めるという空気が運動部活動のなかに漂っていることが理解できる。

これら複数のエビデンスからは、運動部やスポーツ系学部の大学生のうち半数程度は、スポーツ指導時における暴力を容認していることがわかる。かれらは、暴力にそれなりの意義を感じている。暴力に百善があるとすれば、おそらく三十か四十くらいは、あるいはもしかして百二十くらいは利があるのかもしれない。

「暴力には百善しかない」「暴力では強くなれない」は、各種調査のエビデンスを前にしてはまったくの無力である。もちろん、別の調査ではおそらく暴力の否定的な影響が大きく出ているものもあろう。私はそれを無視しようとは思わない。

ただ大事なのは、多くの人びとが暴力を肯定的にとらえているという現実である。その容認的態度こそが最大の問題点ではなかったか。脈々と暴力が受け継がれてきた、その日本社会の素地に踏み込むことで、暴力の現実を直視することが必要なのである。

科学的スタンスを重視すればこそ、ときに科学から深く降りることも大切である。エビデンスがあるときに、そこに意味を与え、評価を下すのは、一人の人間である。エビデンスを前にして、どう立ち振る舞うのか。そこにこそ科学者としての醍醐味と難しさがある。

私自身は、暴力には指導者においても生徒においても、一定の効果があると考えている。そのようなエビデンスが出ている以上は、「効果がない」「強くなれない」などと、無責任なことは言えない。暴力を受けたことで、気を引き締めて真剣にスポーツに向き合った人もいるだろう。平手打ちされたことで奮起して実力をつけた人もいるだろう。それは現実に行き起きていることだ。

その現実を受けて、そのうえで一人の人間として、私はここに表明したい。暴力には、効果がある。そうだとしても、もはやめようではないか。暴力に代わる、効果的な指導方法を生み出すべく、みんなで知恵を絞ろうではないか。体育の専門家、教育の専門家、学校関係者は、暴力なしでどのような指導が可能か、追求していかなければならない。

今日はもう、暴力に頼る時代ではない。言論に頼る時代、知性に訴える時代なのだから。

# 平成28年度入学試験 小論文「出題意図」

## (入試情報公開用)

人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻  
推薦入試Ⅰ (スポーツ)

1. 評価の客観性を確保するために、単なる自分の考えや感想を作文させるのではなく、スポーツ・教育に関わる資料を示し、理解力、論理的思考力、表現力を総合的にみることとした。
2. 2012年12月に発生した「桜宮高校の体罰事件」を契機に、部活動指導における体罰の根絶が叫ばれ続けている。しかし、平成25年度に発表された文部科学省の『体罰の実態把握について(第2次報告)』においても、部活動指導中の体罰発生件数は、中学校1073件、高等学校948件という数字が報告されている。本専攻の受験生にあっては、中学、高校において真剣に部活動に取り組んだ体験を持っているはずである。その体験を踏まえながら資料を読み、部活動指導における体罰問題についての自らの考えを論理的に表現できるかをみる。